

公園雑記の内「緑陰」

「豊橋公園の自然」(恒川敏雄著)

昭和58年発行より (p. 87)

緑陰＝青々と茂った木のかげのことで、梅雨の明ける7月中旬ごろになると、木かげが親しまれる。公園の樹陰の芝生やベンチに憩う人たちが散見される。改めて緑陰公園として見直さざるを得ない。ここにも公園の重要性が思われる。

豊橋市の中心に、このような地が温存されたことは市民の英知であって後人の遺産として、引き続いてほしい。緑陰の王座はムクノキと常緑のタブをとりたい。枝張りの発達した木である。たんなる二種だけで樹陰にはならない。前にいろいろ述べた木たちが互いに協力しているかたちである。しかも、自然に構成された樹陰が一番いい。美術博物館もさぞ涼しいことであろう。館の北に足を進め、豊城神社の大ケヤキを訪ね、城下の川岸の石垣にたたずみ花火見物をすれば、夏の公園を満喫することができよう。

対岸の金色島のエノキの下で腰をおろし、古城の姿を仰ぎ、戦国の世をしのぶのもよく、河原辺の水に足を浸し、小生物を漁るのはさらに面白い。こんな公園が他にあらうか。人工が加わらない光景がよいのである。自然を最大限に生かすのが都市公園の真髄ではないだろうか。

玉にキズは城下橋北の草地である。河川改修が未完成のおりとて望むのはムリであるが、ヤナギ、ポプラ、センダン、ハンノキなどによって木かげづくりを望みたい。せめてヨシずでも仮設しては。郊外の緑陰は普門寺、嵩山の蛇穴周辺、大蔵神社、石巻上社付近が挙げられる。



豊橋公園の緑陰

2011年 定例自然観察会

都市公園の自然 ～豊橋公園の30年



まだ青いイチョウの実
(7月4日撮影)

第3回(7月10日)
主催:NPO法人東三河自然観察会



NPO法人

東三河自然観察会

1. イチョウ：「豊橋公園の自然」（恒川敏雄著：昭和58年発行）（p. 37）

ことしも実が見え出した。まだ青く、よく見ないと気づかない。熟するのも近いようだ。イチョウは雄木と雌木とあるが、枝ぶりだけでは区別しがたい。枝形でわかることが望ましいのだが、わたしのカンでは雌木はしだれているように思う。

豊橋の街には多く植栽されている。中野町や愛大、時習館の周りに太い並木がある。豊橋公園付近の街路にも少なくない。体育館入口

にある大木屋さん前のイチョウは太くはないが、毎年実が鈴なりにになり、枝が引き下がっている。もう一本は、児童公園の便所わきのも実がよくなるので近くの人々はよく知っている。この付近では太い方でまわりは二メートル近い。どの通りでも雌木が少々混じっている。大崎の竜源院、老津の太平寺のイチョウはともに雌木、両方ともまわり約五メートル。街路樹の王であるが広い道路に限りた。



雄木



雌木

2. 7月中旬の植物季節：「豊橋公園の自然」（p. 88）

キョウチクトウ、ノウゼンカズラ、ムクゲ、ハマボウ（盛は下旬）、マサキ、花壇、ゴマキの赤い実、ナンキンハゼ、ダイコンソウ、葦毛のモウセンゴケ末期、石巻山のイタチササゲ。



ゴマキの赤い実

（山溪カラー名鑑 日本の樹木より）



ナンキンハゼの花

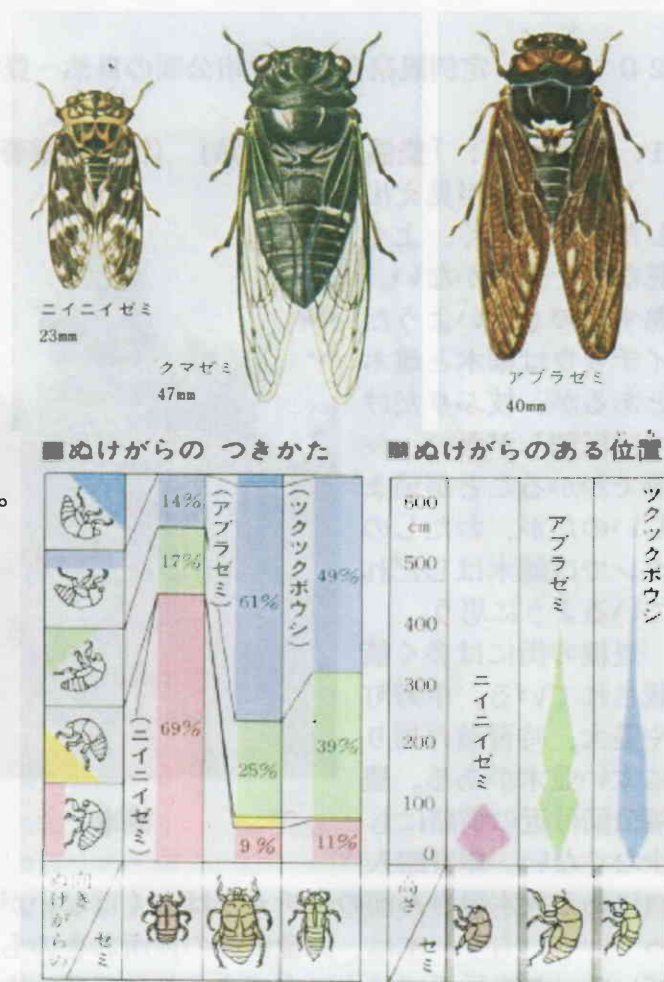
3. セミ（1）：「豊橋公園の自然」（p. 39）（この項は「鈴木氏」の筆による。）

樹木の多い公園内はセミの仲間たちにとっても良好な生息環境となっており、夏の吉田城跡はセミ時雨の中にあつた。

八月十八日、セミの声を求めて公園内を散策してみた。

クマゼミとアブラゼミの大合唱の真っ最中である。クマゼミは日本では最も大きなセミで、平野部では極めてふつうにみられる種類で、7月に入ると姿を見せ始め八月前半に発生数はピークに達し、9月中ごろにはほとんど姿を消す。センダンの木を特に好み集団をつくり、早朝よりにぎやかな合唱がはじまり暑い一日のはじまりを告げるかのようだ。

ニイニゼミの声も時々聞こえてくる。豊橋公園では一番早く出現するセミで、六月半ばから見られるようになり、七月後半が最盛期となる。その後は徐々に少なくなるが、出現期は長く、九月に入ってからでも鳴き声を聞くことができる。一番小さなセミで抜けがらには泥が付着している。このような脱皮殻は樹木の枝先などでも多くみられる。たそがれ時には、地上に這い出た幼虫が脱皮して、成虫になる様子も観察することができる。



(図:「野や庭の昆虫」小学館より。

「抜けがらのつきかた」、 「抜けがらのある位置」は、橋本治二氏の調査による。)

4. 朝の散歩:「豊橋公園の自然」(p. 84)

五六・六・二〇日朝、金田玲子さんのお知らせでエビすきの状況を見学に行く。朝の五時ごろ、折から満潮時にあたりお城下の豊川は大河の姿となっていた。鏡のような水面に金色島の倒影がうつり水と森の美しさに酔う。お城下の石壁に降りる。花崗岩の護岸に大人二人がしきりにエビすきを楽しんでいる。エサはジャガイモで糸で結んで岩間につるし獲物を待機する。やがて芋が動き始めるとエビの後ろから網をセットし手早にすくい上げる。巧妙。手の長い(テナガエビ)エビがとれた。今朝は水温が低いので不良。干潮のときは水が澄みエビの動きがよくわかれると教えてくださった。今はフナがいやというほど釣れるとの話。(途中省略)

六時ごろになると、帰りを急ぐ人々が目立つ。エビすくいは八時まで。今はアカテガニも、びっくりするほど出入りしている。お城下の豊川べりは魚釣りセンターであるが、岸に漁業権の立て札が立っている。考えさせられる。

夏の朝の公園は、実にはぎやかである。早朝野球、庭球、ゲートボール、岸边や森中での詩吟、はや歩きなどさまざま。釣りはもちろん、参加者はほとんど八町校区であるが旭、新川、松葉からも集まる。いや豊橋市民がくる。豊橋公園にとっては、豊川が母である。



テナガエビ

「生きもの図鑑」 金の星社より